

## 四国三県・ぶらり途中下車の旅

松崎 武志

今年の3月下旬、ふと四万十川が見たくなり、高知へと旅立った。本当は青春18 きっぷでのんびりと旅を楽しみたかったのだが、時間が無かったため、飛行機で往復することにした。

全日空 563 便は予定より 30 分遅れて羽田を離陸し、定刻より 30 分遅れて高知龍馬空港に着陸した。外はあいにくの雨だった。直通バスで高知駅へ向かった。バスの窓から南国の象徴・椰子の木が並んでいたが、風にあおられていた。

高知駅は市の中心街から離れたところにあり、駅の周りに賑わいは無かった。次の 15:19 発中村行き特急南風 11 号まで時間があったため、遅い昼食を取った。駅の 2 階にあるレストランで鰹定食 (800 円) を食べた。確か鰹のシーズンは 5 月から 8 月ではなかったかと思いつつも、美味であった。

帰りは高松からの便を予約していたため、「四万十・宇和海フリーきっぷ」(4800 円) を購入した。JR・土佐くろしお鉄道問わず、松山までの特急の自由席に乗車できた。

目的は四万十川だったが、どうせなら足摺岬にも足を伸ばし、ついでに温泉にも入りたいと思った。これが失敗だった。予約した 1 泊目の宿は中村駅からバスで片道 1 時間 40 分の場所にあった。

### 教訓① 足摺岬は路線バスで行く場所ではない

中村 17:20 発のバスに乗ったが、宿の最寄りのバス停に着いたのが 19 時前で、2000 円近くかかった。辺りは真っ暗だったが、宿の隣が鰹節製造工場のように、強いカツオの匂いがした。

平日ということもあり、客は私の他には 1 組の中年夫婦しかいなかった。この付近には四国八十八ヶ所巡りの霊場があるようで、どうやらお遍路さんのようだった。

翌朝、太平洋を見ながら入った露天風呂は最高だったが、また中村に戻るのに 100 分もバスに乗るのは憂鬱だった。「岬めぐりの～バスは～走る～・・・」(山本コウタローとウィークエンド『岬めぐり』) と、心の中で歌ってみたが、四万十川の河口の街・中村に宿を取っておけば、こんなことにはならなかったと後悔した。

### 教訓② 四万十川と足摺岬は一度に行く場所ではない

10 時過ぎに中村駅へ着くと、駅前でレンタサイクルを借りた。そこから自転車で 15 分ほど走ると、大きな赤い橋の下に広い川があった。「四万十川」と看板があったが、前日からの雨で濁流となっているその川は、私の頭の中にある四万十川ではなかった。しばらく上流に向かってサイクリングロードを走った。

四万十川といえば、沈下橋（ちんかばし）である。沈下橋とは、洪水で流されないよう欄干が無い橋のことである。それを見ずして、四万十川は語れない。やがて曇り空の隙間から陽が射してきて、汗ばんできた。もう 10km 以上走っただろうか。ようやく中村駅から最も近く、そして最も大きい「佐田沈下橋」に着いた。

おお、これが沈下橋か。橋の中ほどにある、車のすれ違いのために幅が広がっている部分まで行くと、前から車がきた。端に寄ると、川面が見えた。「最古の源流」といわれた清流は見る影も無く、ただの濁流だった。使い捨てコンタクトのスペアを忘れ、眼鏡をかけていた僕は一瞬目がくらみ、落ちるのではないかという恐怖感に襲われた。

#### 教訓③ 四万十川へは晴天が続いた日に、コンタクトで行こう

すると前方と後方から車がきた。邪魔にならないよう自転車を移動させ、すれ違いを見守った。2 台の車は絶妙のハンドル裁きで、お互いをやり過ごした。見ているこちらが心配になるほど、車は橋のギリギリを走っていった。

やがて前から観光客がゾロゾロと歩いてきた。橋の反対側へ渡ると、そこには観光バスが止まっていた。「4 キロ上流に三里沈下橋」という案内があったが、もはやそこまでペダルをこぐ気力は無く、中村駅へと戻った。

特急南風 20 号で窪川まで行き、そこから予土線で宇和島へと向かった。予土線は別名「しまんとグリーンライン」とも呼ばれ、四万十川とその支流に沿って走る。車窓風景が美しいポイントではわざわざ徐行してくれるので、観光列車としての役割も担っている。もちろん沈下橋も数多く見られ、駅を過ぎたすぐ後に沈下橋を見つけると、何も中村まで行かなくてもここで十分ではなかったかと、結果論とはわかっていても後悔した。

#### 教訓④ 四万十川を見るなら、予土線ですべて事が足りる

宇和島で特急に乗り換え、2 泊目の宿泊地・松山へ向かう。翌朝、松山から市電で道後温泉へ足を伸ばした。終点・道後温泉駅で降り、商店街を抜けると、映画「千と千尋の神隠し」で出てきた湯治場のモデルとなった「道後温泉本館」がある。

ここには男女別の大浴場「神の湯」の他、選ばれし者（高額料金を払った者）だけが利用できる休憩所付の小浴場「霊の湯」がある（個室利用・貸浴衣・貸タオル・石けん・坊ちゃん団子付なんてコースもある）。一般庶民の僕には休憩所なんて勿体無いので、大浴場で温泉を堪能した。

#### 教訓⑤ いくらお金を払っても、温泉は同じ

松山から高松へ行き、讃岐うどんを味わって帰ろうと思い、12:15 発特急いしづち 18 号に乗ったが、やがて止まってしまった。先行列車が踏切事故のため、運転を見合わせているとのことだった。

30 分ほどして運転は再開したが、しばらくは徐行が続いた。悪天候のため、瀬戸大橋が不通になり、ダイヤが乱れているようだった。やがて速度を上げ始め、何とか 55 分遅れで高松に到着した。

高松空港 17:00 発の羽田行きに乗るためには、15:50 発のバスに乗らねばならなかったのだが、すでに時刻は 15:42 だった。高松へ来た意味も無くなり途方に暮れるも、とにかくバスに乗った。

16:25 に空港へ着き搭乗手続きをするうちに、讃岐うどんの店を見つけた。時間はかかったけど来た甲斐があったと内心喜んだ、というよりはむしろ自分に言い聞かせた。

#### 教訓⑥ 空港に行けば、その土地のものがほとんど味わえる

空港内をうろうろしているうちに、ここが映画「世界の中心で、愛をさけぶ」で使われた空港だと気づいた。長澤まさみが座っていたのはこの椅子か、森山未来が「助けて下さい！」と叫んだのはこの辺りか、などと考えているうちに出発時刻が迫ってきたので、搭乗口へと向かった。

旅を終え、羽田空港に降り立つと、日本テレビで土曜 9:30 から放送中の「ぶらり途中下車の旅」のナレーター（滝口順平）の声が、脳裏をよぎった。

「ところで松崎さん、四国に何しに行ったんですか？」

「来週からの鉄研春旅行の下見だよ。」

「高知なんて行かないじゃないですか。」

「...。」

#### 教訓⑦ やっぱり旅は鉄道に限る

現在、鉄研には9名の高3部員が在籍している。彼らは中一の時に、存続の危機に瀕していた鉄研に入部してくれた。以後、週2回の部会を定着させ、ホームページ班と模型班に分かれて活動するという現在のシステムを構築し、そして念願だった部への昇格を成し得るなど、第1期黄金時代を到来させ、数多くの功績を残してくれた。

この5年間は楽しいことばかりではなく、様々な衝突や軋轢もあり、残念ながら高2での引退前に鉄研を去っていった部員もいたが、彼らも含めると15名の高3が活動に携わってくれた。

現在、高2までで25名の部員がおり、特に今年は14名の中一が入部してくれた。その活動の様子は第2期黄金時代を予感させるものである。その礎を築いたのは、他にもない現高3部員である。来年3月に高輪を巣立っていく彼らに、この場を借りて厚く御礼を申し上げる。6年間、本当にありがとう。鉄研での思い出を胸に、希望の進路を歩めることを切に願っている。